

財団だより

第128号

2010.12

多摩川

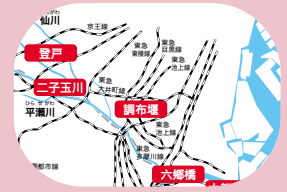


Photo & Text :
遠藤 穎彦 (Hidehiko Endo)
世田谷区在住

丸子橋付近

東急東横線の多摩川駅にほど近い丸子橋付近は、多摩川で最も人の集まる場所で広い河川敷の公園や散歩道が造られて、休日や天気の良い日にはのんびり釣りを楽しむ人、川岸を散策する人、右岸の川崎側の広い河川敷は、ラグビー・サッカー等スポーツを楽しむ人々、その上ゴルフ練習場まであり、朝早くから公園は一杯になっています。

なお丸子橋少し上(かみ)の東横線ガード下近くには調布取水堰があり、昭和11年(1936年)に国により飲料水供給の為に造られたのですが、今では工業用水に利用されています。

また防潮堰の役割も果たし、ハゼなどがすんでいるとの事、左岸には水質汚濁監視室も設置されています。

[当財団は2010年10月1日に公益財団法人となりました](#)

Contents 目次

■ 巻頭言	2
■ 特別寄稿	3
■ 多摩川に学ぶ	4
■ 多摩川散歩	5
■ 私と多摩川	6
■ 歴史・多摩川	7
■ インフォメ多摩川	8・9
■ 財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内	10・11

河川とエコロジカル・ネットワーク



東京農工大学 名誉教授
第2回とうきゅう環境財団
社会貢献学術賞受賞

亀山 章

生物多様性基本法の公布・施行にともなって、都道府県や市町村で生物多様性地域戦略を策定しようとする動きが各地で見られる。その内容は、生物多様性に関する情報の収集と現状の把握、施策の現状と課題、対応の方策、アクションプランやリーディングプロジェクトなどの重点的取り組み、推進体制の整備などを骨子としている。そのなかで生物多様性の保全において、生きものからみた最も重要な視点は絶滅の危機の回避であり、そのために生きものの生息空間に関するエコロジカル・ネットワークの計画が急務とされている。

エコロジカル・ネットワークの構築には、現存する生息地（ハビタット）の保護、質的に低下した生息地の環境の改善、失われた生息地の復元、新たな生息地の創出、生息地を結ぶ回廊（コリドー）の確保、が重要になる。

わが国の大都市の多くは大河川の流域に立地しているので、エコロジカル・ネットワークにおける大河川の役割が注目される。そこで東京を例にして、そのことを考えてみたい。

河川の生きものについては、国土交通省の河川水辺の国勢調査がある。東京都の大河川は、江戸川、荒川、多摩川の3つであることから、これら3河川の最近の調査結果を抜き出してみた。哺乳類では、江戸川が11種、荒川が16種、多摩川が17種である。これら3河川には共通してヒミズ、アズマモグラ、ノウサギ、ハタネズミ、アカネズミ、カヤネズミ、タヌキ、キツネ、

イタチが出現している。ハタネズミやアカネズミなどの草原や森林の生態系の指標種や、湿地のヨシ原に多いカヤネズミが出現するのは動物の生息地として多様な環境を有していることの現れである。ノウサギやタヌキは生息環境の広がりにつながりが確保されていることを示すものであり、生態系の上位の捕食者であるキツネやイタチがみられるのは、河川の周辺を含めた生息環境が広く残されていることを示している。多摩川のタヌキは、上流から下流までのほぼ全地点で四季を通じてみられる。猛禽類では、江戸川が5種、荒川が7種、多摩川が8種である。3河川には共通してオオタカ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウが出現している。生態系の上位の捕食者であるこれらの種がみられるのは、哺乳類の上位種と同様の理由による。

東京を上空から見ると、幅が数百mもあるこれらの大河川が、山地から丘陵地と台地を横切って海につながっているのがわかる。河川といっても水面よりも陸地の面積がはるかに大きく、ここが動物の生息地と移動路の2つの機能をもっている。それらは面積が大きいこと、周辺の環境とのつながりがあること、立地や植生などの環境が多様であること、かつての里山のような適度な管理がなされていること、などが大きな特徴としてあげられる。また、大河川は、支流の中小河川とネットワークしており、河川が生きものの生息地をつなぐ大きな役割をもっていることがわかる。

生物多様性を保全するためには、生きものの生息空間に関するエコロジカル・ネットワークの計画の策定が急務である。そのためには、生きものの生息状態と生息地の環境に関する情報が必須の要件になる。東京における大河川の生きものを例示したのは、生物多様性時代には生きものを主体とした思考が重要であることを、より深く認識していただきたいからである。

特別寄稿

「魚道の研究から 多摩川を見た課題」



日本大学理工学部
土木工学科
環境水理研究室

教授 安田 陽一

私が魚道に関する研究に着手して12年の歳月が過ぎました。はじめは、長崎大学に所属されていた三矢先生（現在、退官されています）ならびに水産大学校に所属していた浜野先生（現在、徳島大学の教授として勤務されています）との出会いから甲殻類（エビ・カニ）の遡上・降河が可能な魚道の研究を始め、長崎県内にエコステップ魚道が整備され、エビ・カニ・ハゼ・貝・遊泳魚（アユ・カワムツなど）の上り下りが可能な環境を造り出すことができました。その後、多摩川の下流部に位置する調布堰の神奈川県側で遡上できなかった状況を暫定的に設置した簡易魚道によって、遡上可能な環境を造ることができました。この取り組みには、東急環境財団の支援を受けました。いずれの場合も斜めの壁に形成される水際の流れの緩みが遡上可能な環境にしたことがポイントです。

魚道の研究がさらに進み、プール式台形断面魚道を提案することができました。この魚道はエビ・カニ・ハゼ・貝はもちろんのこと、体長80cm以上のシロザケから体長5cm程度のカワムツの稚魚まで遡上・降河を可能にするものとなりました。提案した効果はそれだけに留まらず、洪水流によって運ばれる20cm程度の石や流木が洪水時のプール内の流れによって排出可能な構造となっていることです。さらに、中央に切欠きを有する石積み式台形断面魚道を共同開発し、継続研究の途中であります。水量が毎秒 $0.03 \text{ m}^3/\text{s}$ から毎秒 $10 \text{ m}^3/\text{s}$ まで変化しても遡上・降河可能な環境を造り出すことができました。

多摩川では、ここ10年間でニヶ領堰より上流側の堰にハーフコーン型魚道が設置されてきました。ハ-



エコステップ魚道



梯子状の簡易魚道



プール式台形断面魚道



中央に切欠きを有する石積み式の台形断面魚道

フコーン型魚道は魚道幅の半分程度の幅で水が流れることで正常に機能します。水量がそれ以上増えると遡上できる環境にはなりません。この結果、多摩川で流れる水量に比べて魚道からの水量が少ないため、迷う魚が増え、堰上げて出来た池の中で迷って降りられない魚も無視できない状況になっています。宿河原堰では、両側に整備された魚道によって遡上できる環境はありますが、堰の中央にあるゲートから仔魚が流れ落ち、副ダムからの流れが階段に衝突するため、衝突死する可能性が高い環境になっています。迷入することなく、安全に遡上・降河できる環境になることを願います。



ハーフコーン型魚道
多摩川の現状



宿河原堰副ダム下流側の流況

日本大学理工学部土木工学科 教授 安田 陽一
〒101-8303 東京都千代田区神田駿河台1-8

TEL: 03-3259-0409

E-mail: yokyas@civil.cst.nihon-u.ac.jp

多摩川に学ぶ

多摩川連続ゼミナールを開催



多摩川源流研究所

所長 中村 文明

多摩川の歴史や業績に光を

多摩川は昔から江戸と東京の発展に深く関わってきたし河川行政の分野でも環境を住民運動の面でも全国に先駆けた業績は数多い。しかも、日本の政治、経済、文化の中心都市になくはならない存在であったといえよう。こうした多摩川の歴史や特性を我が国の河川工学の第一人者である高橋裕東京大学名誉教授を講師としてお迎えして、多摩川連続ゼミナールが、川崎市多摩区のせせらぎ館で7月2日と10月5日の2回に渡って開催された。会場には、多摩川に関心のある市民が大勢駆けつけた。このゼミナールは、多摩川流域ネットワーク（TB ネット）が主催し、多摩川流域懇談会とNPO 法人多摩源流こすげが協力して開催された。

多摩川の自然特性を解明

7月2日は、主催者を代表して中村文明TB ネット代表と元永秀国土交通省京浜河川事務所長がそれぞれ挨拶した後、高橋先生が「多摩川の自然特性」をテーマに講演した。高橋先生は、多摩川は、流域面積が1240 平方 km で全国第49 位、流路延長は紀ノ川や米代川、雄物川とほぼ同じ138km で全国24 位であることを指摘した後、1968 年には、全国で初めて砂利採取全面禁止措置が執られたことや1970 年には横山理子さんらによる多摩川の自然保護運動が開始され、盛んに自然観察会などが取り組まれ多摩川の自然を守る住民運動が広がり、1980 年には画期的な河川環境管理計画が策定されたこと、さらに流域の住民の投票による多摩川八景の選定や多摩川誌が発行されるなど全国に先駆けた河川行政や住民運動があること、また流域の市民と行政とのパートナーシップによる川づくりの取り組みや仕組みづくりが開始され、1998 年には

多摩川流域懇談会が設立され、2001 年には、多摩川河川整備計画が策定されるなど、多摩川は非常に多くの全国に誇れる取り組みがあることを紹介、参加者に大きな確信を与えた。

小河内ダム竣工までの歴史

10月5日は、「小河内ダム竣工までの歴史」をテーマに講演した。高橋先生は、「小河内ダムが迎った歴史は苦難の昭和史の投影である」と前置きし、ダム起工に至る苦闘を克明に



語り、1932 年に東京市会でダム建設が議決して以降戦争による工事中断と再開への苦労は並大抵でなかったが、幾多の難関を克服しつつに1957（昭和32）年に竣工式をあげることが出来たことを分かりやすく語った。ダムが完成したものの、1964 年、東京オリンピックを控え東京は深刻な水不足に見舞われ、都水道局にはマスメディアからの非難が集中、これを契機に利根川からの給水が開始されたが多摩川の重要性は依然として変わらない。高橋先生は、この小河内ダムは、水道専用ダムとしての先見の明が遺憾なく発揮されたものであることや1901（明治34）年に尾崎行雄らが情熱を傾けて設立し、経営が開始された都水源林の先見の明について詳述、多摩川の歴史や業績についてももっとも若い人に伝えて欲しいと締めくくった。高橋先生の連続ゼミナールは、11月16日に最終回を迎える。



多摩川散歩

清瀬のトンボ

(6年間の生態調査から)



清瀬の自然を守る会

井上 和男

日本には200種近いトンボが生息していると言われ、昔からトンボの多い国「あきつしま」と呼ばれる所以でもありました。ヨーロッパ全体でも110種程度ですから、飛び抜けてトンボの多様性豊かな国と言えます。私たちが子供の頃は至る所に当たり前の様にトンボがいた記憶があります。しかし経済発展に伴う都市化の影響で、都市周辺に限らず、里山や農地の自然環境は著しく後退し、特に水辺に依存するトンボ類や水生昆虫類は、最も大きな打撃を受け激減した生き物でした。川の水質汚染、水田の減少、農薬被害、低湿地の埋立て、河川改修で排水路化など、環境を全く無視した開発が進行し、種によって生活環境が異なり、多様な環境がないと生きられないトンボにとっては、まさに受難の時代でした。



チョウトンボ()

トンボの魅力や素晴らしさは今更言う

に及びませんが、近年失われた自然環境を復元する活動が、漸く各地で活発に行なわれだし、ビオトープ作りや多自然型川づくりなど、身近な場所でのトンボ復活を意識した環境作りが広まってきたため、目に見えてトンボの増加傾向が現れてきました。

さて清瀬市でのトンボの現状はどうだろうか？清瀬には秋津(トンボの古名)の地名も残っており、恐らく昔から多くのトンボが生息していた名残りであろうと想像されます。平成年代に入り、柳瀬川の清流と自然環境の復活に加え、金山緑地公園(S62年)や金山調整池(H6年)の完成、更に各学校プール、下宿ビオトープ公園、そして所沢城山公園の池や溪流など、柳瀬川と金山調整池を中心にして、環境の異なる多様な水辺環境が創出しネットワーク化された事で、トン

ボの生息環境拡大に加えて往来が自由になり、これに伴って種数も飛躍的に回復してきました。勿論トンボだけでなく、水辺に依存する植物、野鳥、魚などもこの傾向は顕著に現れてきました。特にトンボ復活の核になったのは、平成13年から始まった金山調整池の本格的な環境保全活動(金山調整池ワークショップ)であったと思います。

当初は写真撮影も難しく試行錯誤の連続でしたが、撮影を続ける中でトンボの発生環境、発生時期、天候などの関係や、種毎に異なる特徴や行動など徐々に理解できる様



コフキトンボ(オビ型)

になりました。また会員同好者との情報交換や生息調査・確認作業も頻繁に実施し、撮影と観察を6年間継続してきた結果、ほぼ実態が明らかになり、最終的には40種類を超えるトンボが、この清瀬に生息している事がわかりました。

今までに明らかにできたのは35種ですが、この他まだ解明できない種も多く、今後も実態解明を続けて行く予定です。また平成16年から昨年迄の6年間に清瀬のトンボ実態調査では、特に平成17~18年に新たな種の確認が続出し、その後生息種は安定または減少している事など、自然環境への警告も明確に読み取る事ができます。

まだ不十分な資料ながら、トンボの生息環境と生息種数は確実に復活傾向にあるのは間違いなく、東京の平野部で見られるトンボの殆どの種が確認されており、質量共に本当の秋津が戻って来る日も近いと確信しております。特に確認された35種の内、東京都の絶滅危惧種9種、絶滅留意種6種(北多摩地区対象)が含まれており、トンボたちの置かれている環境は依然厳しく、決して予断を許さない現状にあります。

トンボは自然環境を計るバロメーターとよく言われますが、これからも生物の視点に立った多様な環境作りが必要であり、特に外来種からの保護対策が最大の課題になると考えております。



クロイトトンボ

私と多摩川

多摩川の恩恵にあずかった 「六郷用水」を、次世代につなぐ



六郷用水の会

代表 加藤 芳夫

はじめに

多摩川河口部の左岸は東京都23区で最大面積を占める大田区である。大田区は江戸初期から大正期まで300年以上に渡り「六郷用水」を通じ多摩川の恩恵を受けた農業地域であった。大田区対岸の川崎市側に同時期に開削された二ヶ領用水も、来年の竣工400年にむけ各種記念事業が企画されている。私は昨年の大田区民大学「六郷用水に学ぶ」の修了生有志が設立した地域活動団体「六郷用水の会」に属している。以下、会の活動内容と2011年の完成400年に向けての活動を紹介する。

「六郷用水」を地域の歴史的遺産と位置付けて

1590(天正18)年に徳川家康が関東南部を領地に入国した当時、多摩川河口部の左岸・六郷領(現在の多田区)は広大な平地部にもかかわらず水利の悪い荒地であった。六郷用水は、この平地部に家康が灌漑用水路網づくりを小泉次太夫に命じ14年の歳月をかけ開削させた。1611(慶長16)年、多摩川右岸の二ヶ領用水とほぼ同時に網の目のように張り巡らせた支線網まで完成させた。水路は狛江市・和泉の取水口から世田谷の国分寺崖線に沿って大田区矢口付近までを幹線水路とし、これにより先の平地部一帯を稲作地帯へと変貌させ、まさに江戸・明治期は「城南の米蔵」を支える恵みの水として活躍した。その後宅地化、工場の進出に伴い六郷用水は灌漑用水としての使命を終えドブ川となり、その後ほとんどがあんきょ暗渠化され、現在に至る。

「六郷用水の会」はアクティブな地域活動団体に

「六郷用水の会」は、平成21年6月から平成22年3月にかけて大田区民大学「六郷用水に学ぶ」という講座の受講成果を生かすべく、有志が平成22年4月に発足した地域活動団体である。会員は20～80歳代まで幅広い世代で男女半々の20数名からなる。様々な経歴を持つ会員が各自の得意分野を活かし積極的な活動

をしている。私たちは隠れていた六郷用水に磨きをかけ、地域の歴史的遺産として評価し、老若男女の多くの皆様に、楽しみながら、六郷用水を親しみ、理解していただく活動を行っている。



快適な「まちづくり」につながる活動を

「六郷用水」を住民の五感に訴える活動を通し、「まちづくり」の可視化(見える化)で認知度を高める。地域の生涯学習・学校教育支援など「学び」の機会提供、景観・環境保全および観光の視点での地域振興など様々な切口で地域に浸透することを目指す。「五感で味わう水路跡ウォーキング」、「観る・語る展示イベント」はガイドによる展示解説を、「文化交流イベント」は他団体との連携を重視し、「次世代に伝える活動」は、地図、冊子等の資料・教材づくり、展示用模型づくりをはじめ、幼児向け「読み聞かせ」、昔の体験談を語る「語り部」探し、小学校に学習支援で「六郷用水」の理解促進を図る。また、行政などへ住民参加型の提言活動も行っている。

六郷用水を次世代につなぐために

来年2011(平成23)年は六郷用水完成400年の節目の年に当たる。大田区が都市化する大正期以後の100年は都市基盤の生活排水路(どぶ川)と役割を変えるが、40年程前から下水路整備(暗渠)の普及で姿を消す。近年その一部は環境親水路として復元したが、依然として忘れられたままの存在である。来年2月13日は六郷用水完成400年シンポジウムを大田区内で開催する。多摩川流域の河口部も環境保全を考慮した良好な景観と快適な「まちづくり」に少しでも役立てればと願い活動している。



六郷用水の会

ホームページ：<http://web.me.com/miasan/65/>

連絡先：65400@m01.itscom.net

〒145-0064 大田区上池台4-26-5 コムメゾン上池台101

歴史 / 多摩川

多摩川崖線沿いの別荘地



世田谷区
文化財保護審議会会長

稲葉 和也
(建築史家)

江戸時代、町民にとって仕事でも遊びでも親しみのある川は何といても隅田川、大川でした。

河口の鉄砲洲には諸国から回船によって物資が荷揚げされて商人たちが集い、蔵前には諸国から集まる旗本・御家人の俸禄米が札差たちによって売買され、浅草の材木町でも陸揚げされた材木が商いされました。このように物資の集散地が大川沿いには多かったので、そこで働く商人や職人も川沿いに住まい、浅草寺の境内地が信仰を兼ねた遊びの中心となっていました。さらに日本堤からは吉原にも行け、天保年間には猿若町に芝居小屋も建ち並び、町人に限らず武士達にとっても大川端は遊興の地でした。

しかし人口が増え、過密な町となった江戸の町人たちは、やがて郊外に名所旧跡や田園風景を求めて出掛けるようになります。

一方多摩川（玉川）は奥多摩の材木や薪、炭などの物資を江戸に供給する川でしたが、絶えず氾濫する暴れ川でしたので、大川に較べると馴染みは薄い存在でした。けれども化政期（19世紀）頃から全国六玉川の一として膾炙され、古来から名産品のアユや、ナマズなどの川魚や旨いそば屋などが文人たちに紹介されるようになりますと、訪れる人たちも次第に多くなっていきます。



崖線からの富士山と多摩川の風景 『江戸名所図会』

明治維新になって、大川端の幕府や大名屋敷は払い下げられて、三条実美の対鷗荘や有馬家の別荘、政財界人の別荘が建ち並びます。けれども明治の中、後期頃から、上流の川沿いには多くのレンガ工場ができ、石浜にはガス工場、蔵前には火力発電所など次々と工場が多くなり、環境も悪くなっていきます。

多摩川沿いが見直されるようになるのは丁度その頃からで、それまでは交通も不便な所でしたが、玉川電鉄や京王電鉄も開通し、多摩川の砂利で路も舗装されて車でも行けるようになりました。



二子玉川国分寺崖線沿いの別荘地 (世田谷区教育委員会)

三軒茶屋までの大山道沿いには、明治20年代からは陸軍の施設が続々とできましたが、明治40年には東京で最初の郊外電車玉川電気鉄道が開通し、駒沢村の新町住宅（大正2年分譲開始）が売り出されます。ここは東京の軽井沢とも宣伝され、庶民には高根の花でしたが、上流階級の別荘が上野毛から岡本にかけての崖線沿いに建てられていきます。

明治39年、田健次郎が上野毛の駐日ハワイ公使の別荘を買い受けたのが最も古いようですが（戦後に五島美術館となる）、岩崎家は二代目彌之助が亡くなると岡本に豊廟を建立し（明治43年 設計J・コンドル 震災後静嘉堂文庫を建設）、その裏手に三代目久彌の別荘を設けた（聖ドミニコ学園内 のち弊原喜重郎の別荘となる）。大正4年に清水組の二代目清水揚之助も瀬田に別荘を建てますが、国立第一銀行頭取渋沢栄一の喜寿を記念して建てられた誠之堂（深谷市に移築 重文）と関係がありそうです。さらに水戸の徳川圀順、小坂順造、高橋是清など政財界の重鎮たちは、富士と多摩川が眺められるこの崖線沿いをこよなく愛しました。

現在、二子玉川は繁華街所となりましたが、つい40年前までは江戸と変わらぬ水田地帯でした。

インフォメ 多摩川

多摩川流域の各種団体等の12月から23年3月頃まで行われる環境活動に関する主な行事・イベント情報を紹介いたします。

美しい多摩川フォーラム

- 第3回多摩川子ども環境シンポジウムを開催(12月11日14時~17時、昭島市フォレスト・イン昭和館)
- 第3回美しい多摩川フォトコンテスト審査結果公表 (応募受付:12月31日まで)
- 第3回美しい多摩川フォトコンテスト入選作品展&多摩川の四季・百景 スケッチ原画展
(3月8日~13日:青梅市立美術館)
- 多摩川夢の桜街道~ボサノヴァ・チャリティー・コンサート~(3月26日、羽村市)
- 問い合わせ先** 美しい多摩川フォーラム事務局(青梅信用金庫 地域貢献部内) 担当:宮坂/土方/及川
TEL:0428-24-5632 FAX:0428-24-4646
Email:forum@tama-river.jp URL:http://tama-river.jp

がさがさ水辺の移動水族館

- 多摩川天然アユ 人工授精卵放流会(参加費無料)
12月5日 10時~12時(12時からアユ試食会・お弁当をお持ちになると良いです。)
集合:川崎市多摩区稲田公園内おさかなポスト前(無料駐車場・トイレ・水道完備)
受精卵を付着させるタワシをお持ち下さい。
タワシにアユの卵をつけた後、多摩川に流します。持ち帰ることはできません。
多摩川天然アユの試食会があります。
(協力)川崎河川漁業協同組合、川崎いなおロータリークラブ、川崎市老人クラブ連合会多摩区老連、川崎市遊技場組合、株式会社建設技術研究社環境部)
 - 多摩川自然観察会と釣りによる外来魚類調査・おさかなポスト里親会(参加費無料)
12月12日・19日・26日 いずれも13時~16時(13時集合)
1月9日・16日・23日・30日 2月6日・13日・20日・27日
集合:川崎市多摩区稲田公園内おさかなポスト前(無料駐車場・トイレ・水道完備)
刺し網と釣りでコクチバスなどの捕獲をします。
(協力)川崎河川漁業協同組合、川崎いなおロータリークラブ、川崎市老人クラブ連合会多摩区老連、川崎市遊技場組合、株式会社建設技術研究社環境部)
*『おさかなポスト』とは、飼育できなくなった魚やカメなどを預かる施設で、預かった魚やカメは里親さんに託し、責任を持って最後まで飼ってもらう活動です。学校や高齢者施設などには無償で魚をお渡ししています。企業や店舗などのCSR事業等の一環として、多摩川の生態系や環境に寄与する事業として、『おさかなポスト』里親水槽を設置していただける企業や店舗などを募集しています。詳しくはメールか電話にてお問い合わせ下さい。
 - 調布市 家庭教育セミナー講演(参加費無料)
12月25日 時間はお問い合わせ下さい。
演題:多摩川的环境保全活動から見える現代人のモラル、命の意味
場所:調布市立富士見台小学校
 - 多摩川カウントダウン2011!(参加費無料)
12月31日 23時~翌1時(23時集合)
集合:多摩川河口殿町公園 川崎区殿町3丁目14番地
多摩川の0キロメートルで2010年を送り、2011年を迎えます。対岸の羽田空港のイルミネーションを望み、新年の凜とした空気を感じます。片道1.6kmのウォーキングになります。
 - 法政大学第二中・高等学校 講演会(参加費無料)
1月29日 14時~16時
演題:多摩川が結ぶ親子と地域
- 上記イベントへの参加希望者や、おさかなポスト里親希望はメールにてお申し込み下さい。
- 問い合わせ・連絡先** ガサガサ水辺の移動水族館・おさかなポストの会 代表 山崎
メールアドレス RiverRanger777@gmail.com 電話 090-3209-1390

財団法人 世田谷トラストまちづくり

世田谷トラストまちづくりビジターセンター身近な自然と触れ合うミニイベント～
世田谷区成城4-29-1(野川沿い)(毎月第2土曜日・原則午後1時30分～3時
要申込、内容により時間変更有)

冬のバードウォッチング～二子玉川周辺

(1月22日・午前9時30分～11時30分 要申込)

問い合わせ (財)世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課
TEL 03-6407-3311 FAX 03-6407-3319
財団HP <http://www.setagayatm.or.jp/>

GeoWonder 企画 むさしの化石塾

○野外計画主催 GeoWonder 企画 むさしの化石塾 「岸辺の楽校」 日程

- ・1月23日:「多摩川中流域露頭観察1」 昭島市拝島町多摩川観察 1時30分 左岸水道橋土手上集合
 - ・2月20日:「多摩川中流域露頭観察2」 昭島市大神町八高線鉄橋下左岸 1時30分集合
 - ・3月20日:「多摩川中流域露頭観察3」 多摩川右岸側露頭散策 日野駅1時30分集合
- 参加費 1000円(資料代含む)

申込・問い合わせ むさしの化石塾事務所 福嶋まで
携帯:090-1769-8020 FAX:042-567-1095
Web 申込 E-mail:geo@extra.ocn.ne.jp

多摩川自然観察会

2010年度 多摩川自然観察会～多摩川および博物館・美術館めぐり～

・四季折々の多摩川の自然を観察する(リバーミュージアム)とともに、多摩川の自然の変遷や、多摩川と人との関わりの歴史などを、観察地近くにある博物館・美術館を訪ねて学びましょう。多摩川と博物館の双方を訪ねることで、自然科学から人文科学、社会科学の分野まで幅広い視野から多摩川を知ることができるでしょう。

12月19日 陸橋周辺の多摩川と石川酒造「史料館」

- ・青梅線・八高線・西武拝島線「拝島」駅改札口集合・解散
- ・ほかに多々ある博物館にも寄りたいが、正月のお屠蘇は多摩の地酒でという誘惑も断ち切れず、ついふらふらと石川酒造へ。もちろん河川敷に多数点在する池廻りがメインです。

1月16日 川崎市民ミュージアムと川崎市等々力地先の多摩川

- ・東横線・南武線「武蔵小杉」駅北口バス停前、解散は東横線「新丸子」駅
- ・かつて多摩川の史跡巡りを特集した時に一度訪れたことのある本格派博物館、川崎市民ミュージアム(常設館入場無料)で、川崎の人たちと多摩川との関わりを豊富な展示品を通して学びます。その後、等々力水辺の楽校のフィールドを見学しつつ丸子橋まで歩きます。

2月20日 府中市郷土の森博物館と大丸用水堰周辺の多摩川左岸

- ・南武線「分倍河原」駅南口「ちゅうバス」9時35分発乗車、解散は「府中本町」駅
- ・右岸の本格派博物館が川崎市民ミュージアムなら左岸のそれは府中市郷土の森博物館(入場料200円)であることに異論はないでしょう。石材作業場だった広大な土地に盛土し植林して“森”らしくなったのは人為力が自然力か。では多摩川の自然は人為的でないと言えるか。

3月20日 調布市郷土博物館、京王フローラルガーデンアンジェ、京王多摩川から狛江五本松 狛江市西河原公民館(総会)

- ・京王相模原線「京王多摩川」駅前集合、解散は小田急線「和泉多摩川」・「狛江」駅

毎年総会を開く狛江市にこれといった博物館も美術館もないのが悲しい。京王多摩川駅近くにある調布市郷土博物館(入場無料)で学習したあと、京王百花園跡地にできたアンジェ(入園料500円)で花壇を観賞してから多摩川で春の自然を探しつつ狛江市の会場へ。

*一般参加費(保険代と1回分会費送料)300円 事前連絡不要、直接集合地へ。

問い合わせ 多摩川の自然を守る会 柴田隆行 fbstein@cocoa.plala.or.jp

みずとみどり研究会

セミナー

- ・日 時 2011年1月22日(土) 13時～18時ごろまで
- ・場 所 国分寺市 労政会館 4階会議室
- ・参加費 無料
- ・内 容 第1回セミナー「地下水研究の現状」、第2回セミナー「浅層地下水の研究」、第3回「深層地下水の研究」の総まとめを行います。

主催・申込み・お問い合わせ

みずとみどり研究会

連絡先 〒185-0021 東京都国分寺市南町2-1-28 飯塚ビル202

TEL/FAX 042 - 327 - 3169 E-mail : mizutomidoriken@ybb.ne.jp

六郷用水

基本タイトル 「六郷用水完成400年シンポジウム」

サブタイトル 歴史遺産を未来資産へ

日時：2011年2月13日(日)午前11時～午後3時半

場所：嶺町文化センター

【シンポジウムの主な内容】

<午前>

- ・小学生の地域学習成果の発表

<午後>

- ・基調講演：講師 宮村 忠氏（関東学院大学名誉教授）講演演目、内容未定
- ・他区での活動団体による水路復活事例の紹介
- ・嶺町出張所地域町会メンバーによる「語り部」セッションほか

<同時開催>

- ・多摩川駅から嶺町文化センターまでのウォーキング
- ・せせらぎ公園管理事務所等での写真展

主催：六郷用水の会、共催・後援：予定多数

問い合わせ先

六郷用水の会 e-mail:65400@m01.itscom.net

ホームページ：<http://web.me.com/miasan/65/>

二ヶ領用水

二ヶ領用水竣工400年記念シンポジウム

日時 2011年2月27日(日)

場所 川崎市中原市民館

【シンポジウムの主な内容】

落語 ～二ヶ領用水物語

二ヶ領用水みどころスポット等放映

二ヶ領用水フォトコンテスト発表（大会議室ロビーにて展示）

二ヶ領用水のうた 受賞者発表

基調講演

など盛りだくさんのイベントを計画しています。

主 催 二ヶ領用水竣工400年プロジェクト（記念事業実行委員会）

問い合わせ先

NPO 法人多摩川エコミュージアム

TEL/FAX 044 - 922 - 10255

ホームページ：<http://www.seseragikan.com/400th/ivento/e-info110227-2.html>

財団からのお知らせ 助成研究募集のご案内

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究・活動助成の募集

公益財団法人とうきゅう環境財団(理事長 西本 定保)は、1975年(昭和50年)より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果、これ迄に1,076件(新規・継続-学術研究679件、一般研究397件、12億7千万円)の調査・試験研究のお手伝いをさせて頂きました。

2011年(平成23年)4月からの助成についても、従来と同様、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 助成研究対象テーマ

産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究

排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究

多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究

シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川及びその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>

4. 助成の決定

2011(平成23)年3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

5. 応募締切日 2011(平成23)年1月14日(金)

6. 応募にあたっての注意事項

ご応募にあたっては当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報の保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。

過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受け付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。

(次ページへ続く)

7. 助成研究の種別と諸条件

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。 (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの。
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	100万円
単年度の助成金上限額	200万円	100万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	<p>(1) 器具備品費 原則対象外。ただし所属機関や個人で所有するものがなく、調査・試験研究や活動に必要な不可欠なものと選考委員会で認められたものはこの限りではない。</p> <p>(2) 消耗品費 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等。</p> <p>(3) 旅費 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等。</p> <p>(4) 謝金 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等。</p> <p>(5) その他 器機・設備などの賃借料、通信費、その他。</p>	
<p>尚、学術研究については、研究計画の全てが助成金によるものではないこと。旅費、謝金は、それぞれ助成金要望額の30%を上限の目安とすること、上限の目安を大幅に超える場合は、その理由を詳細に記した説明書を申請書に添付してご提出下さい。</p> <p>一般研究については、従来からの調査・試験研究に加えて、シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川およびその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与すると思われるものも選考の対象といたしましたので、奮ってご応募下さい。</p>		



絵：東郷なりさ

「いきものつながり」制作プロジェクト
代表 下重 喜代

発行 サステナブル・アカデミー・ジャパン
E-mail: kiyo-sun@nifty.com

「いきものつながり」環境紙芝居 15のおはなし

No.1 水辺の生態系ピラミッド

地球にはじめてのいのちが誕生したのは、川から水を集めてきた海の中といわれています。

それから38億年かけて、現在のいきものが賑わう地球となりました。

みなさんのまちのどこかにある、川や水路、池など、普段何気なく見ている水辺にも、多くのいきもの暮らしがあります。

水をとってルーペなどで見てみると、小さな動植物プランクトンがたくさん見えます。顕微鏡などが用意できれば、ミジンコなどの元気な姿に、子どもたちも目を丸くして驚くことでしょう(ピラミッドの下から1段～2段が生産者～一次消費者)。

また、これらを餌とするトビケラ、ミズムシ、カゲロウ類やトンボのヤゴたち(総称して水生昆虫と言う)は、川の中の石の裏側や、水際の草の根元あたりで見つけることができます(ピラミッドの下から3段目が二次消費者)。

一方、川の流れの中に目を向けると、これらの水生生物等を餌とする魚が見られます。流れの少し遠い所ではコイ、ウグイ、アユなどが、流れの緩やかな所では、タモロコ、モツゴ、オイカワ、ドジョウが、湧き水やきれいな水が流れ込むような所には、アブラハヤ、ホトケドジョウなどが棲息しています。これらの魚の特徴を図鑑などで覚えておけば、あなたもちょっとした魚博士です(ピラミッドの下から4段目が三次消費者)。

私たちに身近な水辺の生態系の頂点は、魚を捕食するカワセミやコサギ、アオサギ、カワウなどの鳥類(最上段は高次消費者)でしょう。

発行日 平成22年12月1日

編集兼発行 公益財団法人とうきゅう環境財団

〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル8F)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv/>

